

インドネシア リアウ諸島における マングローブ＝人間の相互関係から見る共存の可能性 ーベトナムで学んだ事を生かしてー

平成20年入学
ベトナムフィールドスクール
調査国：インドネシア
原田ゆかり

キーワード：マングローブ・利用・実践・意識改革的支援・共存

1. 自分の研究テーマについて



写真1 Batam pos の記事
「SAVE OUR EARTH」
現地の新聞でも大きく取り
上げられている

地球温暖化問題は現代において最も早急に解決すべき問題の一つであり、その地球温暖化問題の一因として注目を集めているのが熱帯雨林の減少である。熱帯雨林の一種であるマングローブは、汽水域に生育する植物の総称であり、薪炭・木材・タンニン利用などの直接的な利用価値以上に、気象災害の防止および海洋資源の涵養などの間接的により大きな効用を発揮してきた（Mangrove Guidebook For Southeast Asia. 2007）が、近代化が進むにつれマングローブ林とその生態系は破壊され続けており、現在では各地でマングローブ林の保全や再生が進められている。古くから交易路として外来文化の影響を受け続けつつ現在もマングローブ生態系を維持しているリアウ諸島バタム島において、マングローブと人間の共存関係が成功していると仮定し、再生可能な自然資源としての持続的利用やマングローブが与える生態的・経済的価値を明らかにし、マングローブ林生態系と人間の共存における1つの例を提示することを目的とする。

現在バタム島周辺では、マングローブの利用が法的に禁止されている。しかし、炭焼きは今なお行われており、それらはほぼ全て輸出用である。

炭焼きとしての利用を完全に撤廃することが出来ない理由は、それに代わる仕事を住民に与える事が出来ないという現状があるからである。また、現在はエコツーリズムとしての利用が盛んになっており、近代化社会との共存といった点で、これからも比重は大きくなりそうである。



写真2 違法伐採の船

彼らは昔ながらの生活を続けているだけであり
「違法」の意識は低い

2. フィールドスクールで得られた知見について

私が今回のフィールドスクールに参加した理由の第一は「将来の職業選択として実務家を目指す学生」のためのプログラムであるということを知ったからである。その点において、今回のフィールドスクールはとてもよい機会であった。今回は支援を行っている外国政府・NPO・地元研究者・実際支援を受けている人々など、色々な立場の方々からお話を聞かせて頂く事が出来、色々な立場からのベトナムの問題点を知ることができた。本来これらの人々は、協力して事業を進めて行かなくてはならない。しかし日本においても、恐らくどの国においても連携を取るのには容易ではない。私がそれらの組織のどこかに所属してからでは、他の組織の意見を素直に聞く事が出来なかったかもしれない。そう考えると、とても良い機会を得ることが出来たと感じた。

残念であったのは、時期のせいではあるが、アヒル水稻同時作や魚水稻同時作などの支援技術の定着を、実際に見る事が出来なかった事である。また、実際に地ごしらえなどの作業も体験してみたかった。どれだけ大変な作業なのか、どれだけ苦労してここで暮らしているのか、ということを実感出来たのではないかなと思う。話を聞くだけではなく、実際の活動を一緒に体験してこそ、本当にその場所における問題点・現状を理解することが出来るのではないかなと思う。実際に少数民族の村などを訪れはしたが、「見学」止まりであったことがもったいなかったかなと思う。



写真3 青々とした農作物が茂る畑

3. フィールドスクールで学んだことをどのように研究テーマにいかせるか？

特に勉強になったのは、JCVの活動の結果を見る事が出来たことである。住民の生活習慣を考慮した上での技術的指導を行うことにより、現実的な支援を行っているという印象を持った。その結果、技術的な躍進はもちろんのことそれに伴った生活スタイルの変化が見られた。収穫の増加はアヒルのお陰なのか、作業習慣の改善によるきめ細やかな作業のお陰なのか。

このような、生活習慣や実際の現地における問題点を顧慮した上での支援は重要である。マングローブは現在世界中で保護が叫ばれており、支援のためにお金もつぎ込まれている。外と内の人々の間の連携が重要となってくる。今回は支援する側・実際に支援を受ける側・支援結果を評価する側など、色々な立場から見た「発展途上国援助」というものを見ることができた。今後近代化の波に更にさらされて

いくマングローブを守り続けるために、これらの間の差異というものを意識して研究に取り組んで行こうと思う。